

む

花美月

「山梨日日新聞」に枕詞を載せた遊び心に注目。「ぬばたまの黒岩さん」とか、いろいろ登場してもいいだろう。

レア二百グラムにナイフを入れながら長男は灯  
夫  
を点す  
東條尚子

第四句までの謎めいた展開が見どころ。他の作から推して事情があるようだが、具体的なところは分からないし、分かつてもいいだろう。ゴッホの「じゃがいもを食べる人々」のような登場人物たちの存在感が一首の核になっている。

七月は年の半分ひきつれてドラクロワ描く女神のご  
とし  
内田さやか

七月は八月以後の五か月を従えている。あたかもドラクロワ「民衆を導く自由の女神」のようだ、というのだ。意外な比喩にびつくりする。フランス七月革命の絵だから、冒頭の「七月」に意味があるわけだが、そんな意味の世界をこえて、有名な絵のイメージが眼前する。

昨日より此の家に住む皿五枚サラダを盛れば淵より  
笑みぬ  
西川和榮

新しく手に入れた皿にサラダを盛った場面。いかにも楽しそう、嬉しそうな点が見どころ。皿もただ重ねて置かれているよりも、何かを盛られる方がうれしいのだ。「淵より笑みぬ」は、イメージにリアリティの問題が多  
少あるが、意味的には理解できる。

一つ意志のごとく拳の形して青き柿の実落ちて  
道  
堀重紀

「一つ意志のごとく拳の形して」までが堂々としてずいぶん立派そうだが、夏のはじめに落ちた柿の実である。かなり小さいものだろう。とすると、ごくごく小さいのに、がんばって一人前に「一つ意志のごとく拳の形」をつくっている未熟な柿のユーモアを読みとるべきだろう。下句のかるーリズムは、作者がそのことを意識していることを現している、と読むべきだ。

新聞は朝の窓なりぼさぼさのパジャマ男が空へとひ  
らく  
大谷ゆかり

パジャマ姿で朝刊を広げる男。空へ向かった窓を開くように新聞を広げるといふのだ。まあ、そんな読みでないのだが、「男」に具体的なイメージを代入する読みも可能。たとえば「夫」を代入してみよう。多様な読みが展開することになる。

黒々と微音たてつつ草の実がこぼれ続けて日暮とな  
りぬ  
水本光

第二句が挿入句になっていて、「黒々と……」は直接には「草の実がこぼれ」につづくわけだが、「微音」にも影響するので、音が黒い音のような、不思議な世界へと誘ってくれる。

ボンタンの青きつづら実葉の蔭に凌寒荘の文月の庭  
尾上キヌ子

熱海の凌寒荘をはじめ訪れたおりの今月の五首。花好きだけでなく、植物全般に関心のあった信綱である。その辺りを理解し、季節感を前面に出して成功した一首。